

## 「当直責任者も必読！ 警察署における 交通捜査ハンドブック」差替箇所

- ① 下記箇所に誤解を招く記述があったため、内容を差し替え、お詫び致します。

<93 頁 7～8 行目を以下に差し替える>

(筆者注：こうした事案については、緊急逮捕等の要件を検討すべきと考えられる。なお、②については、当て逃げではなく、ひき逃げであれば、緊急逮捕の要件を満たし得ると考えられる。)

- ② 下記箇所に誤りと誤解を招く記述があったため、内容を差し替え、お詫び致します。

<308 頁下から 12 行目～309 頁末尾を以下に差し替える>

### （想定例 3）時間をかけて飲酒した場合

例えば、体重 70 kg の A が、350ml、アルコール濃度 5 % の缶ビールを、午後 7 時半からの 30 分で 3 本、午後 8 時からの 30 分で 3 本、午後 8 時半からの 20 分で 2 本飲み、午後 9 時に事故を起こし、その後、帰宅し、翌朝、警察署に出頭したとする。

A の事故時の呼気中アルコール濃度を求めるためには、ウィドマーク式計算法を用いることとなるが、同法の場合、飲酒した時間が明らかでない場合、被告人に最も有利となるよう最も早い又は遅い時間に飲酒したものとして計算する（前掲名古屋地判平 19.12.4 参照）。

本想定例の場合、ある程度時間ごとの飲酒量が分かっているので、その時間ごとの飲酒分が、それぞれどの程度事故時点の呼気中アルコール濃度に反映されるかを計算した上で、それらを合計して、同濃度を算出する（捜査に当たっては、証拠によって可能な限り細かい時間ごとの飲酒量を明らかにして計算をする必要がある。）。

- ① 7 時半からの 30 分間の飲酒による事故時点の呼気中アルコール濃度

事故発生は、アルコール濃度 5 % の缶ビール 3 本（1050ml）を飲んだ 1 時間～1 時間半後である。

この場合、飲酒の約 1 時間後だと、呼気中アルコール濃度はピークに達した頃となるが、そこから時間が経過すると同濃度は減少する。そのため、事故の 1 時間半前の 7 時半に上記缶ビール 3 本を飲んだ（飲酒の 1 時間半後に事故が発生した）と考えると、被告人に最も有利となる。

その場合の呼気中アルコール濃度は、1(2)の(7.3式)より、少なくとも以下を上回る。

$$\frac{5 \times 1050 \times 0.05}{12 \times 70} - 0.095 \times 1.5 \doteq 0.17 \text{ (mg/l)}$$

② 8時からの30分間の飲酒による事故時点の呼気中アルコール濃度

事故発生は、上記缶ビール3本を飲んだ30分～1時間後である。

この場合、呼気中アルコール濃度がピークに達するのは飲酒の約1時間後であるので、飲酒の30分後に事故が発生した(被告人が8時半に缶ビール3本を飲んだ)と考えると、被告人に最も有利となる。

ただし、呼気中アルコール濃度は、当初急激に上昇し、ピークが近づくにつれて上昇率が低下するので、飲酒の30分後であれば、少なくともピークの3分の2は優に上回っていると考えられる。

すると、この場合のピークの最小値は0.27mg/l(1(1)参照)であるので、その3分の2は0.18mg/lであるところ、8時からの30分間の飲酒による事故時点の被告人の呼気中アルコール濃度は、0.18mg/l以上と考えられる。

なお、飲酒の1時間後の事故(被告人が8時に缶ビール3本を飲んだ)と考えると、時間的に、ピークに達した後に事故が発生した可能性もある。そこで、上記(7.3式)を用いて計算すると、この場合の呼気中アルコール濃度は以下のとおりとなる。

$$\frac{5 \times 1050 \times 0.05}{12 \times 70} - 0.095 \times 1 \doteq 0.22 \text{ (mg/l)}$$

この値よりも、上記0.18mg/lの方がAに有利な値となるので、上記の被告人にとって有利な値を採用する。

③ 8時半からの20分間の飲酒による事故時点の呼気中アルコール濃度

事故発生は飲酒の10分～30分後なので、まだ呼気中アルコール濃度はピークに達していない。

この場合、飲酒の10分後に事故が発生した(被告人が8時50分に缶ビール2本を飲んだ)と考えると、被告人に最も有利となる。

ただし、呼気中アルコール濃度は、当初急激に上昇し、飲酒の約1時間後のピークが近づくにつれて上昇率が低下するので、飲酒の10分後でも、少なくともピークの5分の1は優に上回っていると考えられる。

すると、この場合のピークの最小値は0.27mg/l(1(1)参照)であるので、その5分の1は0.05mg/lであるところ、8時半からの20分間の飲酒による事故時点の被告人の呼気中アルコール濃度は、0.05mg/l以上と考えられる。

そして、①～③を合計すると、事故時のAの呼気中アルコール濃度は、0.40 mg/lと算出される。